

こんにちは。文化財課の児玉です。昨年のことですが休暇を利用して、北方領土のうち国後島と択捉島の博物館を訪れる機会がありました。両島の博物館には、数多くの土器や石器などの考古資料が展示されており、青森県出土の土器と類似するものも見られました。

今月と来月のメールマガジンでは、国後島や択捉島の土器と本州の土器との関わりを中心に紹介したいと思います。

北方領土の四島は、ロシアの行政区分に従えばサハリン州に属し、国後・色丹・歯舞は南クリル地区、択捉はクリル地区となっています。国後島も択捉島も、建築中あるいは建築後間もない住宅が数多く見られ、その多くは集合住宅でした。慢性的な住宅不足であり、ソ連時代に建てられた古いアパートの建替えが進んでいます。舗装道路も顕著に増えてきており、ロシア化が急速に進んでいることが実感できます。

人口約8,000人のロシア人が住む国後島の博物館は、近年、開設された複合公共施設(行政府・文化ホール・スポーツセンター等)の近くに、新たに整備されました。展示室は自然、考古、歴史のほか浮き玉のコレクションなどで構成されています。

考古のコーナーには、縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器に類似する深鉢形土器が展示されていました。土器の口縁部には2個一対の山形の突起が設けられ、胴部全体には縄文が施されています。土器の上半には炭化物(おこげ)がびっしりと付着しており、現在の鍋のように使われていたのでしょうか。

亀ヶ岡式土器は、東北地方から北海道渡島半島を中心として製作された土器ですが、ここまで分布が広がっていたのには驚きです。

縄文時代の北海道では、石狩低地帯を境にして西南部と北東部とで、土器の型式が大きく異なります。この差異の大きな要因は、本州との距離差や自然環境などから生み出される文化的内容の違いが考えられています。具体的に述べると、亀ヶ岡式系の土器文化圏は渡島半島を主体とする道西南部に分布し、本州との交流が相対的に希薄であった道北東部には亀ヶ岡式系の影響を受けない在地の土器文化圏に分かれます。また、道中央部では、両者の文化が混在した地域も認められます。

このような土器文化圏の差異は、千島列島においても確認されています。国後島・択捉島・色丹島・歯舞島の北方四島(南千島)は、釧路や根室などの土器と類似しており、道北東部の土器文化圏の延長とみることができますが、それより東の中千島や北千島からは明確な縄文土器は、今のところ確認されておりません。

このような状況で、国後島での亀ヶ岡式系土器の存在は、東北地方から渡島半島に関係した人や物、情報が持ち込まれた証としてみることができます。つまり、広範囲にわたる活発なヒトの移動や交流を物語る土器とも言えるのです。

次回は、択捉島の土器について紹介します。